

2024年5月5日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

イザヤ書 61 : 1
マタイによる福音書 5 : 3
「心の貧しい人々は幸い」

【招詞】 ヨハネによる福音書 4 : 23～24

【讃美歌】 24 「たたえよ、主の民」

【詩編交読】 詩編 51 編

【赦しの宣言】 イザヤ書 55 : 7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。
わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讃美歌】 1 「主イエスよ、われらに」

【祈祷】

【聖書】 イザヤ書 61 : 1、マタイによる福音書 5 : 3

【説教】 「心の貧しい人々は幸い」

<貧しさ>

主の日の礼拝では、これから「山上の説教」のイエスさまの御言葉を、一節ずつ聞いていきます。今日は、その最初のところ、「心の貧しい人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである」というところです。

この御言葉は、教会に行っていなくても、聞いたことがある、という方が多いかも知れません。そして、とても印象深い言葉です。

なぜなら、「心の貧しい人々は、幸いである」。貧しいということが、幸いである。それは、この世の価値観とは、全く逆のことだからです。

普通、貧しいことが幸いなんて、あり得ないことです。裕福で、豊かで、満たされている方が、幸いに決まっています。

ですから時々、この御言葉を何とか理解しようとして、「貧しい」というのは、清く貧しい、あの「清貧」のことではないだろうか。ここで言う「貧しい」とは、慎ましきや、質素であること。欲がない、ということであり、そういう生き方が幸いだ、と言っているのではないだろうか。そんな風に考える人もあります。

でも、イエスさまが仰った「心の貧しい人々は、幸いである」の、この「貧しい」という言葉は、極度の、最大限の貧しさを意味する言葉です。

聖書の原語であるギリシア語では、いくつか「貧しい」を意味する言葉があるようですが、それらの中でも、ここで使われている「貧しい」は、一番「貧しい」状態を指します。

極度に貧しい。ただ生活が苦しいとか、あの人より貧しい、とかいうレベルではなくて。

もう、物乞いをしないと生きられない。全く無一文で、他の人に助けを求めて、誰かに頼らないと、生きられない。そんな窮地にある、「貧しさ」のことを言うようです。

<心の貧しさ>

しかも、さらにマタイは「心の貧しい人々」と言っています。経済的な「貧しさ」のことを言っているのではありません。

もし、この「貧しい人々」が、物乞いをするほど生活に困る、生きるのに困る、その貧しさのことを指すなら。わたしたちは、確かに貧しさを覚える時もあるけれど、そこまでじゃない。物乞いまではいかない、と感じるかもしれません。

ルカによる福音書にも、同じイエスさまの説教が語られていますが、そこではイエスさまは、ただ「貧しい人々は、幸いである」と言われていました。

でも、マタイはわざわざ、「心の貧しい人々は、幸いである」と、そこに「心」を付け加えたのです。

心が貧しい。心が、極度に貧しい。心が、窮地にあって、物乞いをして、他を頼らないと生きられないほどに貧しい。それは、どんな状態なのでしょう。

もし、誰かに「あなたは心が貧しいね」と言われたら、それは結構ショックです。

「心が貧しい」。それは、心が狭いこと。度量がないこと。心が豊かじゃないこと。愛に乏しくて、欠けがたくさんあって、卑しいこと。そんな意味です。

心の中に、良いものが何もない。自分を力づけたり、支えたりするものがない。人に与えられるものもない。大切なものが欠けている。それが「心が貧しい」状態です。

これも時に、この「心が貧しい人々は、幸いである」という言葉を、何とか分かるように理解しようとして、「心が貧しい人」とは、謙遜な人のことだ。へりくだって、高ぶらない人のことだ、と考える説があります。

謙遜な人は、幸いである。これなら確かに、普通に誰でも納得できそうです。

でも、謙遜や、へりくだり、というのは、美德とされることです。それは、「心が貧しい人だ」とは言わないで、むしろ、「あの人は心が豊かな人だ」と言われるようなことなのではないでしょうか。

本当の貧しさ。窮地に立たされる欠乏。物乞いをするほど、何も持っていないこと。物質にしても、心にしても、それは、なろうと思ってなるものではありません。

最初に申し上げたように、「貧しさ」が、もし「清貧」だったら。あえて物を手放して、自ら質素な生活を選ぶ、ということもあるでしょう。「心の貧しさ」が、もし「謙遜」のことだったら。自分の努力で、心がけていくこともできるでしょう。

でも、本当の「貧しさ」。本当の「心の貧しさ」。それは、望んでいないのに、そうなってしまう状態。自分ではどうしようもないままに陥ってしまった、「極度の貧しさ」。どうにもならない、悲惨な状態、のことなのです。

<貧しさにあるわたしたち>

イエスさまは、目の前にいる弟子たちに、群衆に、「心の貧しい人々は、幸いだ」と言われました。

今、御言葉を聞いているわたしたちに、「心の貧しい人々は、幸いだ」と言われました。

それは、わたしたちが、「心の貧しい人々」である、ということです。

わたしたちは、これを受け入れられるでしょうか。自分のことを、心の貧しい者だと、思っているでしょうか。物乞いのようなものであると、思っているでしょうか。

愛に欠けていて、満たされていないくて、助けが必要なほど卑しい、悲惨な者であると、自覚しているでしょうか。

また、「心が貧しい人々」を、「心が満たされていない人々」、「心に頼れるものや、支えとなるものが何もない人々」と考えるとき。

「いや、わたしは、いくらかは自分の心を満たすものを、持っている」。「日々の生活で、心の支えになっているものがある」。そう言える方も、いらっしゃるかも知れません。

でも、世のものは過ぎ去りますし、人は変わっていきますし、わたしたちの思いも移ろいます。確かな、揺るぎないものは、何也没有ありません。

本当の本当に、初めから最後まで、わたしたちの心を満たすことが出来るもの、わたしたちの心を支えることが出来るものは、この世にも、またわたしたち自身の中にも、何一つないのです。

そんな中では、根本的に、罪に捕らわれているわたしたちは、どうしても自己中心的にしか歩めません。わたしたちは、欠けた自分の心を満たすために、自分のことしか考えず、互いに傷つけ合ったり、見捨てたりする。都合の悪いことに目をつぶる。心の支えになるものを探し求めて、必死になったり、これぞと思えば、依存してしまったりする…。

…イエスさまは、わたしたちが、そのように「心の貧しい」者であること。極度の貧しさの中で、実はずっと無一文で、自分ではもうどうにもならなくて、ただ助けを求めるしかない、物乞いのような者であることを、しっかり見抜いておられるのです。

わたしたち以上に、イエスさまは、わたしたちの悲惨さを、はっきりと見つめておられるのです。

<天の国>

そんな、「心の貧しい人々」の前で。弟子たち、群衆たちの前で。わたしたちの前で。イエスさまは、言われるのです。「心の貧しい人々は、幸いである」。

何も持っていない、欠けだらけの、心が満たされていない人々。度量が小さく、不親切で、愛を行わず、人を赦せない人々。自分を支える拠り所がなく、頼りになるものを必死に探し求めている、物乞いのような人々。そんな心の貧しい人々は、幸いである。

なぜならイエスさまは「天の国はその人たちのものである」からだ、と言われたのです。

「天の国」。それは、神さまのご支配のことです。神さまが、愛と、恵みと、命によって、わたしたちを支配してくださることです。それが「天の国」です。

イエスさまは、その「天の国」は、その人たちのものである。神さまの愛と、恵みと、命のご支配は、心の貧しい人たちのものである。そう言われたのです。

なぜなら、ここで、「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである」と語っておられる、そのイエスさまご自身が、この「天の国」を「心の貧しい人々」にもたらしするために、来てくださったお方だからです。

今ここで、イエスさまが「幸いである」と語っておられる相手は、誰でしょうか。

それは、イエスさまに招かれ、従ってきた弟子たちでした。彼らもまた、心の貧しさを抱えていたことを、わたしたちはよく知っています。この後に弟子たちは、イエスさまを裏切り、引き渡し、否定し、疑います。弟子たち自身の中には、どんな確かなものもありませんでした。立派さなどかけらもなく、心は、実に貧しいものでした。

そして、イエスさまが語りかけられたのは、いろいろな病気や苦しみに悩み、イエスさまに何とかしてもらおうと思って、救いを求めて従って来た、大勢の群衆でした。具体的な貧しさの只中で。痛みや、苦しみや、嘆きの中で。小さくされて、他に頼るところもなく、ひたすらイエスさまに縋って、御許にやってきた、貧しい人々でした。

そのような、まことに、まったく、心も、体も、何もかも貧しい人々に、イエスさまは言われたのです。

「心の貧しい人々は、幸いである。抛り所がなく、欠乏していて、助けを求めるしかない人々は、幸いである。なぜなら、わたしが今ここにいるからだ。わたしがあなたがたのところに来たからだ。わたしがあなたがたを招き、わたしがあなたがたの乞い求める叫びに応え、わたしがあなたがたの抛り所となり、わたしがあなたがたの欠乏を満たし、わたしがあなたがたを救うからだ。わたしが、あなたがたと共にいて、あなたがたの主となり、あなたがたを愛と恵みで支配し、天の国を与えるからだ。」

…神の御子イエスさまご自身が、神の支配をもたらしお方です。この方が共にいてくださることが。この方の、愛と、恵みと、罪の赦しに与るということが。まさに、天の国をいただく、ということなのです。

「天の国はその人たちのものである」。では、イエスさまはどうやって神のご支配を、天の国を、心の貧しい人々に、わたしたちに、与えてくださるのでしょうか。

…それは、ご自分の命を与えてくださることによってです。ご自分が、わたしたちの貧しさを、欠乏を、卑しさを、罪を、すべて引き受け、わたしたちの罪の贖いのために、十字架に架かって死に、血を流し、罪の赦しを与えてくださることによってです。

わたしたちは、何も持たないゆえに、無一文のゆえに、自分で自分の赦しを得ることもできず、何かを差し出すこともできず、ただ貧しさの中に身を置いていただけです。

でも、ただ救いを求めるしかないわたしたちに。ただ物乞いをするしか出来ないわたしたちに。神の御子イエスさまが、何の見返りもなく、愛を注ぎ、ご自分の命を注ぎ、救いを与えてくださるのです。

そしてそれは、天の父なる神さまが、遠い預言者の時代から与えてくださっていた、救いの約束の実現でした。先ほど読まれたイザヤ書 61:1 にはこうありました。

「主はわたしに油を注ぎ／主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして／貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み／捕らわれ人には自由を／つながれている人には解放を告知させるために。」

この約束を実現する者として、神の御子イエスさまは、この世に遣わされ、貧しい人に、良い知らせ、ご自分が成し遂げられる救いの知らせを、伝えてくださったのです。

<幸いである>

だから今、このイエスさまと出会っている者は、幸いなのです。イエスさまに語りかけられている者は、幸いなのです。心の貧しい者は。物乞いをして、誰かにより頼まなければ生きられない者は。救いを求めて叫んでいる者は。今ここに、より頼むべき唯一のお方が、救い主であるお方が、目の前にいるから、幸いなのです。

…どうしようもない「心の貧しさ」は、わたしたちの悲惨な、罪の現実です。

でも、その現実の只中に、イエスさまは来て、共にいてくださいます。乞い求めるわたしたちに、ご自分の命を惜しまず与えてくださいます。

このイエスさまが共にいてくださるなら、わたしたちは、この貧しくどうしようもないままにあっても、イエスさまによって、罪赦され、新しくされ、満たされ、支えられ、豊かに生きていくことができます。

イエスさまは、「天の国はその人たちのものである」と言われました。

「その人たちのものになるだろう」とか、「いつか、その人たちのものにしてあげよう」と言われたのでは、ありません。

もう今、そうなっているし、これからもずっとそうである、ということです。

もう、天の国は、その人たちのものである。もう、天の国は、その人たちのところにある。もう、わたしは、あなたたちと共にいる。そして、これからもそうである。

…これは、未来のことや、可能性のことではなくて、今ここにある、確かな恵みの現実として、イエスさまが語ってくださったことなのです。

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである」。

これは、イエスさまご自身が与えてくださる救いに基づいて、今ここにある恵みの現実を、イエスさまご自身が、わたしたちに宣言してくださった御言葉なのです。

ここに、わたしたちの、まことの幸いがあるのです。

この幸いは、たとえわたしたちが、この世の人々が「不幸である」と言うような状況に陥ったとしても。その中でこそ、支え、慰め、拠り所となってくださる方が、共にいてくださると知らされている、そのような「幸い」です。

また、たとえわたしたちが、貧しい歩みしか出来なくても。神さまの救いの御手が、何があってもわたしを離さないでいてくださる。神さまの愛の眼差しが、瞬きさえせずに、わたしのことを見つめ続けてくださっている。神さまがその御手のご支配の中に、常に置いてくださっている。そのことを知らされている、「幸い」なのです。

…わたしたち自身の貧しさは、生涯、続くことでしょう。わたしたちが、自分自身の何かによって、心が豊かになる、満たされるということは、おそらく一生ないのです。

でも、わたしたちに天の国を与えるために、十字架で死に、そして復活してくださったイエスさまは。今も、これからも、死ぬときも、そして、わたしたちが終わりの日に復活してからも、永遠に共にいてくださるお方です。

この方が、貧しいわたしたちを、生涯、支え続けてくださる。満たし続けてくださる。拠り所となり続けてくださるのです。

宗教改革者のルターは、死の間際に、このように言い残したといひます。

「我々は乞食だ。それは本当だ。」

わたしたちは、生涯、イエスさまに、恵みを乞い求め続けなければなりません。でも、それに応えて、イエスさまは生涯にわたって、いや、永遠に、恵みを注ぎ続けてくださいます。

このイエスさまの許にあって、天の国のご支配の中にあつて。わたしたちは貧しいながらも、無一文ながらも、すべての恵みをいただきつつ、幸いな歩みを続けていくことが出来るのです。

そして、神さまの愛に満たされて、神さまの御力を頼りにして、神さまを愛し、隣人を自分のように愛する、まことに豊かな歩みへと、一步、また一步と、踏み出させていただくことが出来るのです。

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである」。

ご自分の命をかけて、貧しいわたしたちに、天の国を与えてくださったイエスさまが、今ここに、わたしたちと共におられます。わたしたちは、まことに、幸いです。

【お祈り】

天におられる、わたしたちの父なる神さま

心の貧しいわたしたちを、憐れんでください。しかも、自分のどうしようもない貧しさに、気付くことさえ出来ないわたしたちを、どうか悔い改めさせてください。

しかしまず、イエスさまが、わたしたちに「幸い」を宣言してくださいました。

わたしたちのために、救いの御業を実現してくださるイエスさまが。わたしたちに天の国を与えてくださるイエスさまが。わたしたちのところに來てください、招いてくださり、ご自分の十字架と復活のゆえに、わたしたちに「幸いである」と宣言してくださいますことを、心から感謝いたします。

わたしたちはただ、イエスさまにのみ、すべてを乞い求めていくことが出来ますように。

ただイエスさまのみを拠り所とし、イエスさまからのみ、すべてのことを満たしていただくことが出来ますように。

そして、イエスさまに、満たされ、支えられ、豊かにされる、まことに幸いな歩みが与えられていることを心から感謝して、御言葉に従って歩いていくことが出来ますように。

この祈りを、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 449 「千歳の岩よ」

【信仰告白】 日本基督教団信仰告白

【長老任職式】

【聖餐】

【讃美歌】 73 「主よ、平和のうちに」

【十戒】

【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讃美歌】 29 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン